

# モニタリングサイト1000 里地調査ニュースレター

No. 17 (2017 Aug.)



今回の表紙：長池公園で見た  
ニイニゼミ

## 事務局からのお知らせ (2016 年度の報告)

福田 真由子 (日本自然保護協会)

### 学会や動物園など 3ヶ所で成果発信を行いました

2016年度は、学会での発表やシンポジウムなど成果発信に力を入れたほか、2018年度から始まる第4期調査に向けて、データ活用や調査方法について検討を行いました。

### 哺乳類学会と生態学会で発表しました

里地調査では全国1,500人もの市民ボランティアの皆さんのご協力で、2015年度までに140万件のデータが得られています。このデータを一層活用していただくためのアイデア集めを目的に、2016年度は里地調査検討委員の方々と協力して、日本哺乳類学会と日本生態学会で成果発表を行いました。

2016年9月に筑波大学で行われた日本哺乳類学会では、ポスターによる発表を行ったほか、自由集会（話題提供者からの発表と参加者同士で意見交換を行う場）を開きました。

自由集会には、哺乳類調査の最終同定にご協力いただいている研究者の方も合わせ25名の皆さまにお集まりいただき、前半で、哺乳類の専門家で里地調査検討委員の青木



哺乳類学会 グループワークの様子

雄司さん（神奈川県公園協会）やコアサイト「久住草原」の調査員である足立高行さん、ヤマザキ学園大学の安藤元一さんに、里地調査の特徴やデータの活用事例、哺乳類調査機材の課題等についてご発表いただきました。後半は、参加者同士でグループを

作って里地調査活用のためのアイデアについて話し合い、「活用を進めるためには最新データを早く公開する」「莫大なデータ処理のために画像解析ソフトを活用する」「単なる種数や個体数などの『量的』な指標だけでなく、シカの雌雄の性比といった指標や生態系としての変化を把握できるような『質的』な指標を作る」などのアイデアをいただきました。2017年3月に早稲田大学で行われた

### 新たに第4期(2018-2022年度) 一般サイトを募集します

5年を区切りとして調査を行っている里地調査の一般サイトについて、来年度からの5年間、調査を実施いただける新たなサイトを募集しています。

現在のサイトの分布状況は、東北・北陸・中国地方などが少ないため、全国的な状況を十分に捉えきれていない可能性があります。里山の現状を科学的に捉え、保全施策に繋げるために、皆さまの周りに里山の市民調査に関心のある方がいましたら、ぜひご紹介ください。多くの方からのご応募をお待ちしています。

#### ■応募受付期間：

7月1日（土）～10月16日（月）17:00まで

※応募方法などの詳細はこちら

<http://www.nacsj.or.jp/moni/2017/06/4571/>

### ■モニタリングサイト 1000 里地調査とは

100年の長期にわたり里山の変化を早期に把握し、生物多様性の保全施策に役立てるための環境省の事業です。現在、約200ヶ所で市民ボランティアによる調査が行われています。



コアサイト「穴塚の里山」の調査員  
森本信生さん

日本生態学会では、里地調査検討委員の竹中明夫さん（国立環境研究所）によるポスター発表を行い、里地調査における膨大なデータがもつ様々な可能性・魅力について多くの研究者にお伝えしました（竹中さんの発表内容については7ページ参照）。また、里地調査の事務局である日本自然保護協会によ

る「市民科学」をテーマにした自由集会においても、里地調査の関係者が多く参加・発表し、里地調査のこれまでの成果や課題について共有できました。コアサイト「穴塚の里山」の調査員である森本信生さんからは、「調査の成果活用について、プロジェクトとしてもっと追求してほしい」という大切なコメントもいただきました。

両学会とも多くの方と活発な意見交換ができ、今後のデータ活用のアイデアや多くの方から賛同を得ることができました。引き続き事務局では、調査結果の活用に向けた協力体制をつくるために、学会等での発信を続けていきます。

自然の変化についての報告があり、鳥類の専門家である里地調査検討委員の植田睦行さん（バードリサーチ）や、多摩地域の一般サイトである長池公園の調査員、小林健人さんの発表もありました。また、これにあわせて「里地里山と野鳥～モニ1000の活動から見る身近な自然～」と題した企画展が1ヶ月間開催され、事務局もこれに協力して里地調査の成果を展示し、多くの来園者に見ていただくことができました。

## ■一般サイト多摩動物公園でシンポジウム & 企画展の開催

多摩動物公園で2016年7月、「市民による身近な自然環境の調査」をテーマとしたシンポジウムと企画展が開催されました。一般サイトに登録している多摩動物公園（東京都日野市）は、園内に豊かな里山的環境が見られる動物園です。これまでも、里地調査の成果を発信する企画展が開催されています（2014年カヤネズミ企画展など）。

シンポジウムでは、市民調査から見てきた日本の鳥の変化と、急激な開発が進められてきた多摩地域の

自然の変化についての報告があり、鳥類の専門家である里地調査検討委員の植田睦行さん（バードリサーチ）や、多摩地域の一般サイトである長池公園の調査員、小林健人さんの発表もありました。また、これにあわせて「里地里山と野鳥～モニ1000の活動から見る身近な自然～」と題した企画展が1ヶ月間開催され、事務局もこれに協力して里地調査の成果を展示し、多くの来園者に見ていただくことができました。

各地域で真摯に自然と向き合われている調査員の皆さんからの発信こそが、地元住民の方々に届く大切なメッセージとなります。調査員の皆さんの発表・展示の場がありましたら、事務局もできる限りお力になりますのでぜひお知らせください。



一般サイト「長池公園」の調査員  
小林健人さん



調査員の方も参加したシンポジウムの様子

## ■事務局からのお知らせ（2017年度の事業）

後藤 なな（日本自然保護協会）

### ■一般サイトの地方説明会を開催中

2017年度は、第4期の調査に向けて新たな一般サイトを募集しています（詳しくは1ページ参照）。それに伴い、応募についての地方説明会を開催しており、すでに山形県での地方説明会

は盛況のうちに終了しました。具体的な応募条件や手順のご案内のほか、調査体験や里地調査に関する講演会などを交えているので、現役調査員の皆さまもぜひ遊びにいらしてください。

● 7月 山形県山形市 (終了)

里地調査でわかった野生動物や生態系の変化を切り口に、市民調査の意義を伝えました。哺乳類の専門家である江成広斗先生(山形大学)やコアサイト「天狗森」の調査員の方の講演会もありました。

- ・日時：7月22日(土)  
13:00～16:30
- ・会場：山形大学  
小白川キャンパス  
理学部1号館11番教室

● 8月 東京都中央区 (終了)

里地調査の概要や各調査項目の調査方法の説明とともに、一般サイト「天覧山・多峯山周辺景観緑地」の調査員の方から、現地調査の様子を発表いただきました。

- ・日時：8月19日(土)  
10:00～12:30  
14:30～17:00
- ・会場：中央区環境情報センター  
研修室

● 9月 鳥取県岩美町

市民によるモニタリング調査の意義や成果について、鳥類の専門家である植田睦之さん(バードリサーチ)とコアサイト「三瓶山北の原」の調査員の方による講演会および、鳥類と植物相の調査体験会を行います。

- ・日時：9月24日(日)  
10:00～16:00
- ・会場：岩美町立渚交流館

※各イベントの詳細は、ウェブサイトでご報告します。ぜひご確認ください。  
<http://www.nacsj.or.jp/activities/guardians/moni1000/>

■ 5年を締めくくるシンポジウムを年明けに開催

今年が第3期(2013-2017年度)として調査してきた5年の最終年度です。そこで今までの里地調査の成果や事業の意義を多くの方に伝えるためのシンポジウムを2018年1月頃に東京で開催します。長年調査にご協力いただいた調査員の皆さまや関係者の方に成果をご報告する場ともなりますので、各項目の調査員の方や調査サイトに関係する方、ご興味をお持ちの方などお誘い合わせの上、ぜひご参加ください。



第2期の締めくくりとして行った里地調査のシンポジウムの様子(2013年1月)

こんな写真が撮れました

イタチ



～センサーカメラを使った哺乳類調査の現場より～ No.13「ネズミをキャッチ！」  
一般サイト「唐沢川流域」(埼玉県比企郡鳩山町) 加藤 博さん(NPO法人 はとやま環境フォーラム)

イタチがネズミを捕らえる瞬間が写りました。撮影場所の「石坂の森」は比企丘陵の典型的な里山で、隣接のニュータウン住民の憩いの森として近隣の町からも多くの来訪者があります。そのような場所で「食う-食われる」のドラマを実際に写真で見ることができて感動しました。ただ、ネズミの目を見ていると、ちょっと哀れみを感じてしまいます。

イタチはアライグマ、ウサギについてよく写ります。イタチの生態や他の動物との棲み分けについても知っておきたいと思います。

事務局より 里山の代表的な哺乳類で外見はとてもかわいいイタチですが、里山のハンターということをお忘れさず思い出させてくれます。ぜひ地域の方と共有していただきたいです。

♪センサーカメラで撮れたお気に入りの写真をぜひ事務局までお知らせください！ニュースレターでご紹介させていただきます。

里地調査には全国各地で、個人の方や市民団体の方はもちろん、高校生や大学生など様々な主体の皆さんが参加されています。ここでは、多様な主体が工夫をして調査に参加し、継続されてきた事例をご紹介します。

## ■ 高校・自然科学部で毎年生徒が成長 ～敬愛大学八日市場高等学校～

千葉県匝瑳市の一般サイト「匝瑳の里山」で調査する敬愛大学八日市場高等学校自然科学部は、里地調査で唯一の高校生主体の調査グループです。高校から徒歩10分にある谷津田で、ホタル、カエル、鳥類を10年間調査しています。自然科学部では、

部活動でトウキョウサンショウウオの調査を20年以上行ってきたため、里地調査の参加時に高校としては特別な手続きなく行うことができたそうです。



早朝の鳥類調査の様子

自然科学部は1年生6人、2年生11人が所属しています(2016年)。カエル類調査は通常の部活動の時間で行えますが、鳥類調査は朝が早いので、高校の合宿所を利用するなど工夫しています。ホタル類調査は、全生徒に呼びかけて行い、調査でホタルを初めて見て感動する生徒もいます。調査結果は、生徒自身で入力し、ジャパンバードフェスティバル環境学会や千葉県生物学会で発表したり、

高校の文化祭で展示するなどして活用しています。

参加する生徒は「ホタルやカエルの卵塊を見るなど、調査を通して普段できないことを体験でき、自然をよく知ることができる」「鳥の名前と声を一致させるなど大変なこともあるが、調査で朝早くに歩くのが楽しいことを発見した」と話しています。顧問の吉田直矢先生は「最初はあまり生物に興味がない生徒も、調査を通して自然やそこに生息している生き物をじっくり観察し、大切にしていこうという意識が高まった」と言います。

調査が継続できている一番の理由は、学校の理解とともに熱心な先生が長く活動に関わられたことです。敬愛大学八日市場高等学校は私立高校で先生の異動がなく、前任の八木幸市先生は、退職された今も調査をサポートしてくださっています。一方、課題は、学校行事の重ならない日に調査日を調整すること、また毎年生徒が入れ替わるので調査の精度を保つのが難しい、ということです。これからを担う若い生徒たちが、調査によって地域の自然を見る力が育ったことは、地域の自然を守る上で大きな貢献です。将来学校同士の交流会も持てるよう全国の高校でも調査の取り組みが増えることを期待します。

## ■ 地元市民団体と大学との連携でお互いプラスに

### ～奈良川源流域を守る会と玉川大学生物自然研究部との連携調査～

神奈川県横浜市の一般サイト「奈良川源流域(土橋谷戸周辺の里山地域)」では、奈良川源流域を守る会(以降、守る会)と玉川大学生物自然研究部が協力して、2008年から植物、鳥の調査を行っています。守る会は、1996年の創立以来実施しているゼニタナゴの復元プロジェクトの取り組みで玉川大学と協力関係にあり、そのご縁で現在も生物自然研究部の学生たちが里地調査にも参加されています。

学生の参加は主に植物調査で、最近では毎回約10人が参加して、自主的にコース別に担当者の割り振りなどを行っています。守る会との長年のつながりがあるので、大学を卒業した後もOBとして

調査に参加してくれることもあり、調査後は、会の方々が用意した飲み物とお茶菓子を囲みながら、わからない植物を同定するなど、楽しい時間を過ごしています。生物自然研究部は農学部生が多く、専門分野も近いことから、里地調査を通して、地域の約600種類の野生植物を実際に見て覚え、



生物自然研究部員も参加した野鳥観察会後の鳥合わせの様子

1年で凶鑑いらずになる学生もいるそうです。参加する学生は、地域の団体と共同調査をしてきた実績が、就職活動などで評価されています。守る会のメンバーにとっては、専門知識が豊富な学生に教わることで知見が増え、また一緒に調査することで新しい発見があることが大きな喜びになっています。

調査結果は、奈良川源流域の里山環境の基本データとして、その豊かさと貴重さを地域の住民や行政等に守る会で広報するときに活用しています。生物自然研究部では、大学祭で研究発表や、

個人の研究で活用するなどしています。

連携が継続できている理由について、共同代表の山田健一さんは「第一に奈良川源流域の里山環境が人を惹きつける魅力があること。そして、生物自然研究部は約50年続いている伝統のある部で、OBも含めたまとまりがあることも大きな理由です」と話します。会も地域の自然を守って、次の世代につなげたいという人が集まっていて、「地域の自然を通して学びあう」ことが継続の鍵となっています。

## ■「ゆるい」雰囲気が調査への好奇心を育てる～エゾリスの会～

北海道のコアサイト「帯広の森」では、里地調査のカエル類調査に毎年たくさんの方が参加し、調査が始まって5年経った今では、主体的に調査を行うことができる状態にまで成長されています(詳細は「調査員からの声」参照)。2016年のカエル類調査の参加者は延べ45人で、子供や学生の参加もあり大盛況です。

里地調査の手法が難しくないということもあり、調査員の皆さんが、春の自然の変化やエゾアカガエルの成体や卵塊を楽しみながら観察したり、語り合ったりできる「ゆるい」雰囲気ができています。これが、継続した参加と調査への好奇心の源になっています。



### 調査員からの声

コアサイト「帯広の森」  
池田 亨嘉(ゆきよし)さん  
(エゾリスの会)



調査といっても堅苦しいことなくゆるゆる歩き、「あっ！」の声で集まり、それがエゾアカガエルではなく、花や虫、時には動物の糞やゴミでも、分解して観察したり拾ったり、質問や論議をしたり、喜びや怒り、そんな時間を共有してまた歩き出す。私たちのカエル調査はまるで「きまった講師がいない自然観察会」のようです。

帯広市は水田が無く、湿地も宅地・耕地化して、カエルの産卵地は限られています。調査地の産卵総数も少ないと思うのですが、それがかえって観察の余裕を産んでいるのかも知れません。エゾアカガエルの産卵は道民が待ち望む春到来の合図で、発見自体が嬉しいし、卵から成体まで誰もがカエルとわかる知名度に加え、北海道東部ではエゾアカガエルとニホンアマガエルしか分布していないため、種の同定が要らないのも楽です。

また以前に、私の勤める博物館で行ったカエル調査の連続講座(場所は別)の経験者も里地調査に参加していることも、調査と楽しい観察の融合につながっているようです。

「帯広の森」は自然の復元を目標にした約400haの都市公園です。このうち約3分の1の面積におよそ30年かけて市民が1年ごとに植樹しました。自然林は川や段丘に少し残るだけです。エゾリスの会は、植樹林の保育やその自然の復元度を野生生物から推し量る活動を続けています。

エゾアカガエルの卵塊は1996年には46個しかありませんでしたが、里地調査開始時の2009年では10倍の442個、2013年には753個に増加し、その後4年間は550個前後でした。この時、2009年当時の卵塊数約450個に戻らなかった要因の一つは、周囲の植樹林の成長であると考えています。産卵地から200m離れた植樹林で、森の手入れ活動中に大小のエゾアカガエル(アマガエルも)をよく見かけます。2013年に生まれたカエル達を植樹林が受け止めたと思うと、もっと自然を知りたい、関わりたいという気持ちが強くなるのです。

里山の身近な生きもの達が減少？！生物多様性指標レポート 2016

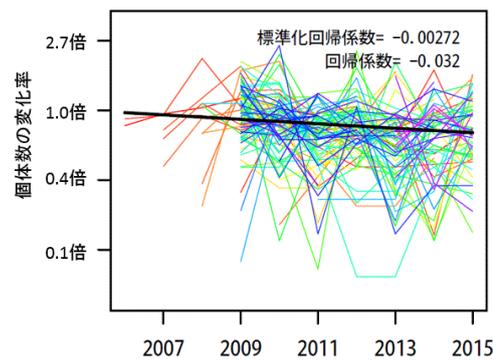


調査員の皆さまのご協力で得られた 2015 年までの里地の調査結果から生物多様性の变化をまとめた「生物多様性指標レポート 2016」を公表しました。ここでは、その結果のうち特徴的であったことをダイジェストでお伝えします。

最も特徴的であった結果は、日本の里山の多くの場所であつては普通に見られたであろう、ゲンジボタル、ヘイケボタル、ヤマアカガエルといった水辺の種や、ノウサギの記録個体数が、全国的に減少傾向にあることでした。ノウサギについては、センサーカメラによる自動撮影調査で行っており、撮影個体数が全国平均で年間 1 割程度の速度で減少していました。また、里山で一般的に最も記録個体数が多いウグイス、ヒヨドリ、メジロといった留鳥も全国的に個体数が減少していたほか、チョウ類全体の記録個体数も全国的に減少していました。チョウ類について種ごとに変化をみると、日当たりのよい草地や湿地を好むウラナミシジミやツバメシジミ、キタテハ、クロコノマチョウなどが減少しているサイトが多く認められました。これらのサイトの中には、耕作放棄や遷移の進行によって畑や畦・湿地が調査開始後に灌木林へと変化している場所もあり、そうした環境の変化が影響しているのかもしれません。

一方で、これまでの調査結果と同様に、生態系に大きな影響を及ぼしうるイノシシ、ニホンジカ、カモシカといった森林性の大型哺乳類や、ガビチョウ、アライグマといった外来種は全国的に分布拡大や個体数の増加傾向が認められました。外来植物の記録種数も増加傾向にありました。

里地調査の多くの場所では、通常の里山と比較して市民による調査活動や保全活動が活発です。それにも関わらず、里山を特徴づけるさまざまな種の個体数や在来種数の減少が生じていることは、里地生



図・ウグイスの記録個体数

態系の生物多様性の喪失が現在も進行していることを示している可能性があります。今後は全国的な変化を明らかにするだけでなく、各調査サイトでの調査成果の活用事例や保全再生の成功事例についても積極的に収集して全国規模で共有していくことにも力を入れていく予定です。同時に、各サイトで活用しやすい調査結果の還元方法の検討も行っていきます。引き続き、調査にご協力くださいますようお願い申し上げます。

もっと詳しく知りたい方へ

「生物多様性指標レポート 2016」本編は NACS-J の ホームページで公開中です。

<http://www.nacsj.or.jp/activities/guardians/moni1000/result/>

里地調査検討委員の竹中明夫さんから2017年3月の日本生態学会の中で発表された、里地調査の解析結果についてご寄稿いただきました。

## 膨大なデータの活かし方を考える

里地調査では、調査者の皆さんが観察したデータが日々蓄積しています。「〇年〇月〇日、ある調査サイトの区画Aでキアゲハを見た」というような、いつどこで何を確認したという情報をひとつひとつ数えていくと、この10年間で集まったデータは約140万件になります。

最近よく耳にするビッグデータほどではありませんが、140万件は膨大な量です。一行に一件のデータを記録した表を作って印刷したとすると、1ページに50行として3万ページ近くになります。手にとってぱらぱら眺めて何がわかるというものではありません。さまざまな工夫でそこから情報を引き出して、目に見える形にする必要があります。

特に多くの種の情報が集まっているのは、チョウ、鳥、そして植物です。現在調査が行われているサイトについて、これまでの観察結果を整理してみました。植物については、とくに里山に典型的に見られる種をピックアップして集計しました。表1が調査サイト数と観察された種の数です。

チョウは、日本に分布する240種余りのうち、3分の2以上の種が観察されています。また、鳥では、日本に生息ないしは定期的に飛んでくる種は350種余りとされていますが、やはりその約3分の2が観察されています。

こうした集計でも里地サイトの種多様性の豊かさの一端が見られますが、これだけではあまりおもしろいことはわかりません。そこで、種ごとに観察されたサイトの数を集計してみました。ある種類の生き物が、里山に普通にいるものなのか、それとも珍しいものなのかということも、ひとつのサイトだけ見てはわかりませんが、全国約200ヶ所のデータを合わせてみればたちまち明らかになります。全国的なパターンを知ることは、個々のサイトの特性を知るための基礎ともなります。

当然のことですが、多くのサイトで出現する種もあれば、ごく一部のサイトでしか見られていない種もあります。表2に、チョウ、鳥、植物それぞれについて多くのサイトで見られた種を示します。

表1. チョウ、鳥、植物の調査サイト数と総種数

	調査サイト数	総種数
チョウ	50	172
鳥	147	240
植物 (全調査対象種)	125	2025
植物 (里地典型種)	125	671

これらの名前に馴染みがないと、カタカナがたくさん並んでいるだけに見える表ですが、それぞれの分類群の調査担当者の眼からは、「これも見た」「あれも見た」「あ、これいない」とひとつひとつの種名が意味ある情報のはずです。

チョウは、調査サイトのうち80%以上で観察された種が32種もありました。また鳥でも18種が80%以上のサイトで見られています。植物でも、ほぼどのサイトでも見られた種もありました。ただし、その中にはヒメジョオンやシロツメクサといった外来種のほか、オオバコ、ツユクサ、カタバミといった市街地でも普通に見られる種が多く含まれていました。里地の典型植物に限定すると、そこまで広く見られる種類はなくなりますが、40%以上のサイトで見られた種が18種ありました。なお、この里地の典型植物というのは、植物が専門の検討委員がざっと選んだもので、これからさらに吟味が必要です。むしろ里地調査の結果から、里山と結びつきが強い種を選び出すのがこれからの作業かもしれません。



里地調査の80%以上のサイトで確認されたツバメシジミ

表2. 多くのサイトで観察された種

■チョウ

80%以上のサイトで観察された種 (サイト数が多いものから)

モンシロチョウ、ヒメウラナミジャノメ、ベニシジミ、イチモンジセセリ、キチョウ、モンキチョウ、ヤマトシジミ、ルリシジミ、アゲハ、クロアゲハ、コムシジ、ツマグロヒョウモン、キアゲハ、キタテハ、ツバメシジミ、アカタテハ、ルリタテハ、ウラギンシジミ、ヒカゲチョウ、ヒメアカタテハ、ムラサキシジミ、アオスジアゲハ、カラスアゲハ、キマダラセセリ、チャバネセセリ、テングチョウ、サトキマダラヒカゲ、スジグロシロチョウ、コチャバネセセリ、ツマキチョウ、ヒメジャノメ、ミドリヒョウモン

60%以上のサイトで観察された種

ウラナミシジミ、イチモンジチョウ、コジャノメ、ダイミョウセセリ、モンキアゲハ、アサギマダラ、オオチャバネセセリ、ゴマダラチョウ、クロコマチョウ、アカシジミ、ヒオドシチョウ、クロヒカゲ、ゴイシジミ、ジャノメチョウ、トラフシジミ、ミズイロオナガシジミ

40%以上のサイトで観察された種

ジャコウアゲハ、ナガサキアゲハ、メスグロヒョウモン、コムラサキ、ミヤマセセリ、オナガアゲハ、コツバメ、ウラギンヒョウモン、オオムラサキ、ホソバセセリ

■鳥

80%以上のサイトで観察された種 (サイト数が多いものから)

ヒヨドリ、キジバト、ウグイス、カワラヒワ、シジュウカラ、ハシブトガラス、ホオジロ、メジロ、ハシボソガラス、モズ、コゲラ、エナガ、ツグミ、ヤマガラ、スズメ、アオジ、ツバメ、ジョウビタキ

60%以上のサイトで観察された種

アオサギ、トビ、カルガモ、キビタキ、シロハラ、ホトトギス、キセキレイ、ハクセキレイ、ノスリ、カケス、アオゲラ、セグロセキレイ、ムクドリ、カワセミ、コジュケイ、カシラダカ、シメ、ルリビタキ

40%以上のサイトで観察された種

イカル、アカゲラ、キジ、マヒワ、オオタカ、カワウ、アオバト、ウソ、オオルリ、センダイムシクイ、ヒガラ、ヤブサメ、サンコウチョウ、ドバト、ヒバリ、トラツグミ、アカハラ、ダイサギ、ハイタカ、キクイタダキ、ミソサザイ

■里地の典型植物

50%以上のサイトで観察された種 (サイト数が多いものから)

ツボスミレ、ハナタデ、アキノキリンソウ、アキノウナギツカミ、マムシグサ、ツリガネニンジン

40%以上のサイトで観察された種

ママコノシリヌグイ、アカバナ、チゴユリ、ホタルブクロ、ナルコユリ、ジュラン、ホウチャクソウ、ネコハギ、ツリフネソウ、サワヒヨドリ、チョウジタデ、リンドウ

30%以上のサイトで観察された種

ウバユリ、ボントクダデ、トウギボウシ、ヤマユリ、イチヤクソウ、ギンラン、ツルニンジン、ワレモコウ、ツルリンドウ、ノダケ、フデリンドウ、コバギボウシ、キンラン、ミゾカクシ、アマドコロ、サイハイラン、ヒメハギ、オミナエシ、カントウヨメナ、トウダイグサ

表2には示していませんが、ごく限られたサイトでしか観察されていない種類も少なからずいます。それらは、例えば分布が北海道だけというように一部の地域に限られているのかもしれないし、そもそも普通は里山には生息しない種が紛れ込んだのかもしれませんが。あるいは、日本全体で見て希少な種類なのかもしれません。種の識別の間違いという可能性もあるでしょう。

100万件以上のデータには、どのサイトに何がいた、という以上の情報も含まれています。それぞれの調査サイトでは、調査ルートをいくつかの区画に分け、それぞれで観察した種を記録しています。さらに、各区画がどのような環境なのか、例えばスギの植林の中や管理している草原、水田沿いといった記録もあります。これをまとめると、種ごとに環境との関係が引き出せるはずで、データの山から見えてくるこうした情報と、それぞれの生き物の専門家の知識を合わせると、里山で見られる生き物に注目した自然診断ハンドブックのようなものができるのではないのでしょうか。

例えば、よく見られる種を紹介しながら、それが里山ならではの種なのか、もっと広い環境で見られるものなのかを説明します。市街地では見られない里山ならではの種なら、毎年代わり映えがしないなと思っていた種も、ちゃんと今年もいることを確認して安心するという存在になります。サイトによっていたりいなかったりという種であれば、どのような里山ならば分布するのかが書かれていれば、その種の暮らす場を守るにはどうしたらよいかを考えられるし、今は見られない種であってもこんな管理でこんな条件を整えればやってきてくれそうだといった積極的な管理方法を考えるヒントも得られるでしょう。そんな診断ハンドブックの作成をぜひ実現させたいと考えています。

事務局スタッフが新しくなりました！

長年里地調査を担当していた高川晋一、福田真由子が担当から離れ、今年から事務局スタッフは、後藤なな、朱宮丈晴、藤田卓、が担当します(写真左から同順)。引き続きどうぞよろしくお祈りします。



モニタリングサイト 1000 里地調査ニュースレター No.17 2017年8月号 (2017年8月21日発行)



発行：環境省自然環境局生物多様性センター  
作成：公益財団法人 日本自然保護協会

〒104-0033 東京都中央区新川 1-16-10 ミトヨビル 2F  
TEL 03-3553-4104 / FAX 03-3553-0139  
E-mail moni1000satochi@nacsj.or.jp  
(担当：自然保護部 後藤、藤田、朱宮)  
ウェブサイト  
<http://www.nacsj.or.jp/activities/guardians/moni1000/>  
今回の表紙：一般サイト「長池公園」(東京都八王子市)